

圖解
 量地指南後編

洋学文庫
 文庫8
 C 299
 4



量地指南後篇序



嗚乎天地之道尚德而右功
算數之功之所由起也故古聖
人列之六藝豈可忽之乎勢
南源昌弘為人博厚其才敏
捷銳意算數焦思斲之窮日之

量地指南後篇序

力一旦豁然曰其妙矣於是
著量地說三篇已行于世又
化後篇藏諸帳中未示人而卒
其孫定興一日奉其書踵余門
再相曰蒼人子者不預家業之
亦大矣故敢續之上梓請子
以文冠其首乃受親其書

搜討摛撫揉贖約隱縮之
地乎尺寸物以何乎抄寫包羅
不泄纖悉之遺宛然如示諸
掌上法算數之至大而昌
弘之勤也何不與人共旨蓋
去之而朽昌弘固亦為也故羅

絡注氏之異同剔決而得旨
中非夫貪常嗜頤者之屬
於有矚目覩其豐譽在是
六揉一隅背馳乎此則中
傷子昌弘昌弘既悟術而
疾既學事而終可謂不

幸矣而其孫續之以數
同志余以姻屬且嘉其
勤曰序之以報系子首
于時寬政丁巳七月上浣
武陵丸山久敬叙



畫地并南後篇序

此とあて勿也。是予が術をとりて、邦に
るふ河と。恐くは、誤りあり。人々、學を好む
こと、はりのふて、ちんま

寶曆四甲戌夏六月 村井蕪道子昌弘識



量地指南後篇稿之總目次

卷之一 雜品解 術名二十一條

規矩全書上卷術名

規矩全書中卷術名

規矩全書下卷術名

同流三四書之術名

別卷術名異

一本術術名異

寸尺用捨

算法用捨

現差用捨

凡例定格

分基發法

見盤大成

盤切用法

盤繼用法

不拘器物

寸尺之用

已尺之用

圖寫之用

收器之用

舊器之號

新器之號

卷之二 器用解 術名二十六條

磁石切要並見込様

指針塵

隱針塵

順逆振様

量地指南後篇卷一

五



高下振樣

振分

隱銘

逆磁石

忍磁石

立覽器

小丸之用

中丸之用

大凡之用並方維圓盤

元器之用

分度之用

渾發之用

方尺之用並試定木

折紙之用

隨川器之用

虎法器之用

圖寫器之用

間竿之用

間紙之用

卷之三極傳解 術名二十七條

夜中間町

船路之考四術並船路器械

遠里之考並遠里之矩

北極之考

真矩之繩二術

地形高低三術

極中不中片極

土手陰知木高二術

高指何分

向指真矩二術

自服指真矩

天守櫓知居所

用山表裏

寫山形

賣山形

求山斜登

知山厚

卷之四算勘術 術名二十九條

算勘之辨

器械之制

町見術名

四町見之辨並平町見

上町見

下町見

向町見

廣遠町見二術

乱面町見

知遠近

知廣狹遠近並扇矩

知山廣程并直立

知物高並別術

知谷深

量井深二術

知水深二術

折竹術三術

量流物

量行程

量兩高下

卷之五渾發術 術名二十二條

渾發功用

算理渾發並三四五之矩

圓理二術

徑矢弦二術
 坪詰
 步詰二術
 錐形
 平面遠近
 斜面遠近
 正面廣狹
 斜面廣狹
 摸望之間町
 知諸高下
 極諸高下
 天口
 地口異
 天口異
 覓先
 覓跡
 草結
 白浪
 樣脚
 樣体
 水月
 地口異
 開扇
 方鏡

總計五卷術名百三十五條

量地指南後編稿之總目次終

量地指南後篇卷之一

勢南 處士 村井昌弘編述

雜品解

一規矩全書上卷術名
 前傳
 本傳
 ○空眼
 眼法
 ○分數
 開地
 ○度量
 註定
 ○見込
 註眩
 ○平町
 註左右
 ○兩斜進退
 註左右
 ○前後進退
 註前
 於開
 ○不動知遠
 註規矩
 ○隔沼河
 註正當
 ○極中不中
 註
 知雙
 ○寸尺用捨
 註雜
 ○算法用捨
 註雜
 ○三四五矩
 註
 術
 ○直極
 註居
 ○知山高
 註谷心
 ○知谷深
 註量深
 ○知

兩山差註面山註知谷幅木丈註明此註知地形高下註極

○指望之間註無的註間竿打樣註器註座而地取註暗指

○直之繩張註極註陰之目的註重開方註知前面廣註正開方

○夜之見樣註極註磁石振樣註器註磁石見樣註器註城

圖註四知註國圖註極註遠里積註極註北極積註極註船

路積註極註道具之制註雜註

右 上卷術名の目録なり。是を以て大畧量地術尽せりとす。古來其師範する人謾小秘奥と傳人として悟りて教海の式小前中後の三等とて同術と粗精與二回小講習せしと見へり。此旨予を取用せざる處なりとす。姑く古法なり。

書面小隨て此小抄出す。覽者此趣を察とせ。

一規矩全書中卷術名後傳別傳

○平町註正開方註前後進退註當開方註左右進退註正開方

不動知間數註大元方註大真矩註神速註隔沼河開註正當

○極中不中註雙開方註中不中片極註極註寸尺用捨註雜

○算法用捨註雜註三四五矩註渾註知山之高註谷四

極直註立註進退之山註術方註面山之差註面山註谷底

知地幅註同知方註指望間町註無的註坐而地取註開指

間竿步樣註器註直之繩張註極註陰之目的註量開方註知

前面廣註正面 〇前面要用註開方 〇夜中見様註極 〇摸

城形註極 〇摸國郡註極 〇現差用捨註雜 〇凡例之格註雜

品註極 〇目的目積註先量 〇分棊發法註雜

右中卷術名の目次大畧上卷の標目小同。是教諭の法

小前後精粗の別あり故なり。取用せざる所あり

といども暫く古法の目次小随て前篇小論せざるものと

後篇小述ふ見る者贅言として訝ることなりと

一規矩全書下卷術名 極傳極要

〇大丸番付註器 〇方維大圓註器 〇真磁石註器 〇忍磁

石註器 〇圖寫屈伸註雜 〇不拘器物註雜 〇收用器註雜

〇舊器号註雜 〇圓知平町註山初 〇前回進退註正面

真矩繩張註極 〇真繩真矩拔註極 〇前面一開註斜面

沿河真矩筋違註正斜 〇沿河筋違重註正斜 〇土手陰知

木高註極 〇向指真矩註極 〇同從脇而指之註極 〇指高

何分註極 〇山谷一開註山谷 〇真沿河註殘子 〇山上谷

底知木高註山谷 數知方

右下卷術名の標目も又上卷中卷の術名と同じれた物
多し。是も講習小精粗ありゆへなり。勿論予が取用せざる
所ありしととも。前篇小記するものとは。後篇よのづ
く右小云うごとし

同流三四書之術名異

- 用合度知高註極 ○山用表裏註極 ○責山同 ○寫山同
- 形同 ○知山厚同 ○天守櫓知居所同 ○向真中日陰指同
- 聚不盡同 ○求山登垂

右同流三四書の術名異ハ好事の者の所為ありて一向取用所なりと云ふも前小云る意味なるゆへ小是小贅す

別卷術名異

- 寸尺之用註雜 ○已尺之用同 ○折紙法註器 ○見盤大
- 成註雜 ○盤切法同 ○盤繼法同

右別卷術名異ハ往々前卷の標目と同一と云ふも其名異なるをりて是小贅す

一本術術名異

- 圓理渾発註渾 ○算理渾発同 ○歩誥同 ○坪誥同
- 方錐同 ○平錐同 ○山形同 ○菱形同 ○片狹同
- 徑矢弦同 ○渾発之働同 ○遠近平町同 ○遠近筋違同
- 前面廣狹同 ○望之間同 ○高下同 ○極高下同
- 天口同 ○地口同 ○覓先同 ○覓跡同 ○様脚同 ○様
- 体同 ○白浪同 ○水月同 ○草結同 ○猥獲同 ○関扇同

○方鏡上同

右一本術術名異ハ。規矩全書二三の書の目次小隨て是と記す。見者標目の混雜を訝るこたなりし

大凡此六件の條目百三十餘前篇四十六條 後篇八十四條ハ。規矩全書其

外。規矩術同流三四家の書を以て。校量して各均したる也

有余とば不芟不足とばこゝを補ふ。猶三四書小洩るこた

とば不益の目次といへども捨ずして。此後篇五卷中に論ず。是

學者をして他の異目りりても。畢竟無益の説なりことを知ら

り為たりと察すべし

寸尺用捨

凡町見術小ねのて。里町反間を量るハ。皆渾癸の事なり。寸尺小拘ることなり。然も寸尺ハ里町反間の基本なり。敢て

捨るは小なり。故小寸尺用捨と云ふ。用捨とは用ふ非ず

捨るはあり。謂たり。其理と委く云ふ。曲尺を量時

ハ。厘毛以下不尽小出來て眼力に及ぶことなり。渾癸を

量るはハ。蛮算なる故。割餘といふことなり。故渾癸を

以て遠近廣狹高低も小計り知るこた。町見術の常と云

ふ。丈尺長き物を計るふ至てハ。渾癸のこた。又近遠

を。曲尺を用て量るの速なるハ。茲と以て此条と掲る

算法用捨

算法用捨とも又寸尺用捨の理小同。町見の支業に

於て算法を用ひずとも害をたふ似たり。さへも算法を

數量の根元なり。捨るにあり。因て用るふあり。捨る

は。假令ハ渾癸を。遠程一里の開除を求るハ。其一里

と三十六小割。その心を一町づつ三十引。残り六町を三百六十間と知る。此内と十間づつ三十引。又残り六十間あるを二間づつ三十小割。時ハ一里の三十分ハ一町十二間をうづめて知る。知ても渾癸めてハ迂遠なる。算法めてハ三十六町を一町づつ三十引。残り三百六十間を二十小除る時ハ即十二間と知る。是に初の二町を加へて一町十二間也。くのて大業速うける。故小至極ハ算法捨るるべ

現差用捨

現差用捨と云ハ此小於て毫厘の違ありてハ彼小至て丈尺の差とかるものなる。又此小於て丈尺の違ありてこそ彼小至て寸分の害とならざる者ゆる。是を用捨と云。尤止とて得ざる此法なり。其害とかるものハ盤面の墨線渾

癸の量口圖形の模寫等なり。其害とかならざるものハ里町及間の増減なり。里町反間ハ假令ハ開餘を求ると此間數其目印もど。十間一尺なりとも。又ハ九間五尺ありても。共小十間と用て深害なり。況郡国の圖方とてハ五十九間六十一間を俱小一町小用るも其妨なり。然ども止とて得ざる此とて好ざるものハ及むる也。總て細密のこまは差を用ひ。疎遠のこまは差を捨るをいふなり

凡例定格

古法云凡例定格と云ハ小差を論ぜざるをいふ。其の詳なることは左小記す
糺寸尺則不論厘毫
糺間數則不論寸分
尺不論厘
寸不論毫
遠則捨寸
近則捨分

糺町數則不論丈尺 遠則捨丈尺
 糺里數則不論反間 遠則捨反
 糺大里則不論町里 近則捨間
六里捨里
小里捨町

分基發法

古法云分基發法といふ。今用る間町里の本をいふ
 となり。古云粟以小粒發分分即發寸尺間丈町里
 也云

間 昔ハ六尺五寸
今ハ六尺なり

町 六十間なり古法三千六百歩を以て田畑の二町を
積と其外面を以て道規の町と

里 昔ハ五十町を用少今ハ三十六丁を
一里とす唐路ハ六丁を一里と

地周 九万里但唐路なり和路面一万里也
是大地塊の一周なり

地徑 二万八千里なり但東西の貫也於南北
三十里の有延故為鷄卵

地度 昔四十三里余今四十一里半六町なり
各和路なり天地共三百六十度を用

右地周地徑地度の三條無誓の言たりといふも古法より
 存せり故小是小贅す

見盤大成

是他流小秘する所の一名目なり。然も此法術每小備ハ
 せり。何ぞ秘訣といふも人々。量地指南前篇中卷下
 卷每術を見て考ふなり

盤切用法

盤切の法割盤法のよりして總て盤面を約やく量る法なり
 占法小山谷割盤平町割盤二方なり。先山谷の術をつとひる
 假令小平町を求る丈數百丈小後小見込の五を割付る
 べし。割合せかたるといふ。留より百丈量る。残る分を切捨

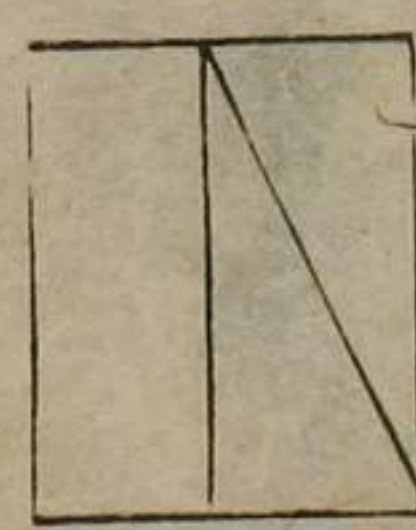
三と量るなり。是山谷割盤の法。又平町
 筋違等竝勤ると。開場小至つて見通
 小間ると。いふは。盤の面の角を見通を
 ろも成難し。其時ハ盤の向の端條會
 にならずして。向も口出来る故。手前より
 真矩を取て盤を割て條會を作し量るべし。是を平町割
 盤といふ

山谷 割盤



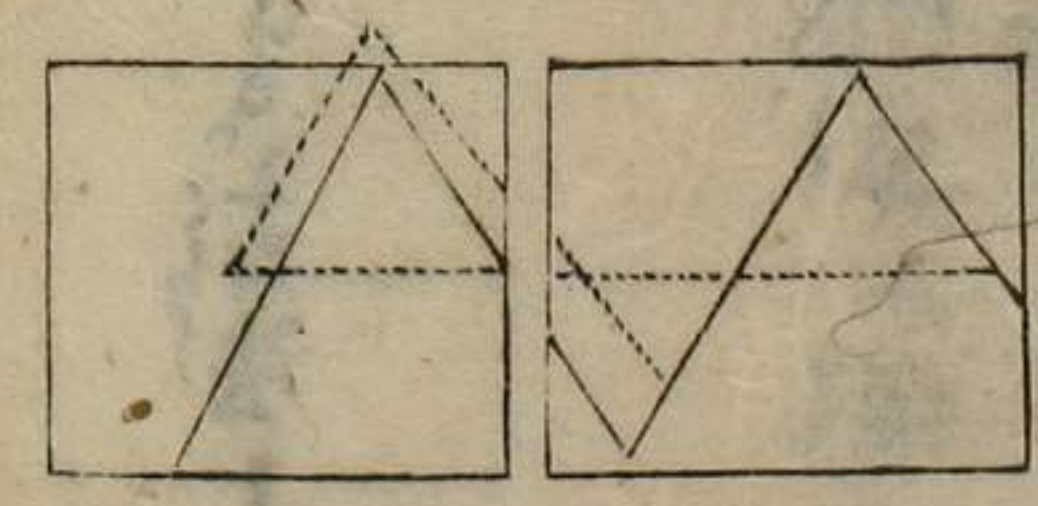
平町

割盤



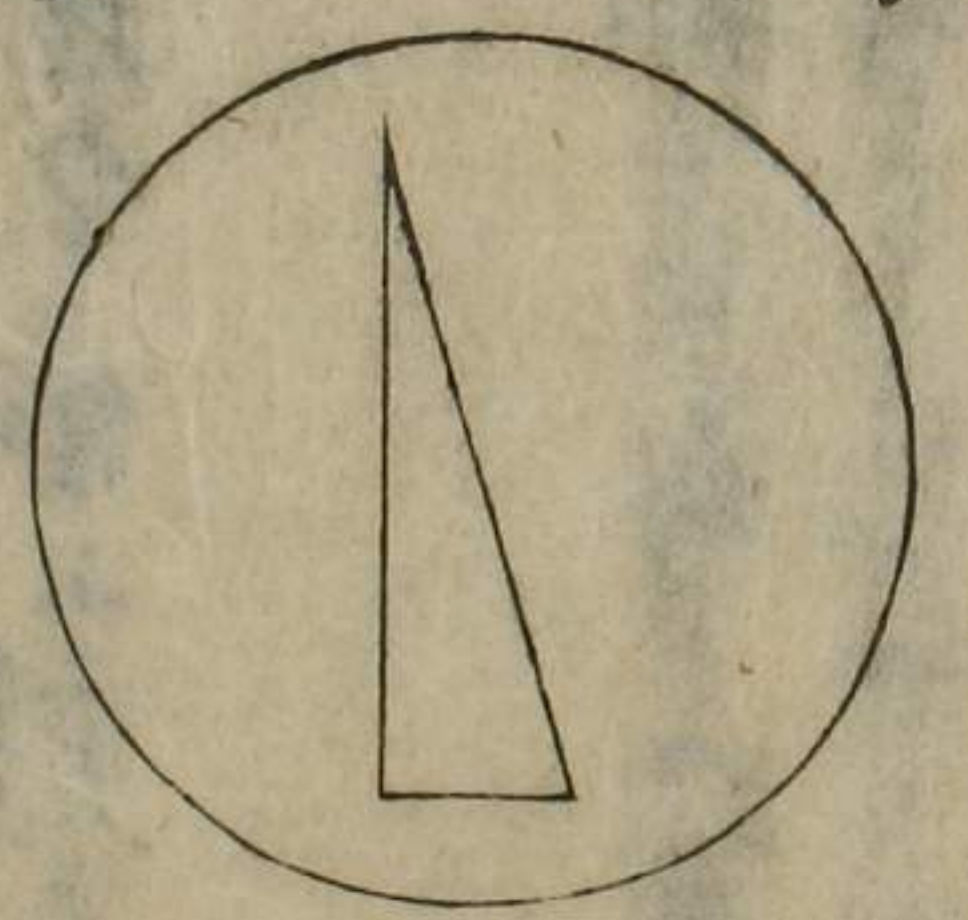
盤繼用法

盤繼といふハ。遠境累隔なる業を勤て盤二面
 摸し。足ざる時。外の盤を併せ繼て用るをいふなり
 前篇より予が所謂併盤といふ是なり。前條より
 述る所の割盤法。又此條小云処の併盤法共に



不拘器物

前篇小委く出たれども。爰に別傳の條目小秘訣なり。其
 記分故小贅言を述て學者の問を塞ぐ
 器物小不拘といハ。町見術の諸器物有合ざるべし。何ふか
 ら。外面平なる物を用て見盤定木のてし。其用を
 かくといふてあり。或ハ定木あり。見盤する時。膳
 盆の類もて用也。但圖のてし。其中めて見込見通を
 して。墨を引とらハ。盤面小其形出來す
 かり。或ハ盤ありて定木なき時ハ。糸と
 針とを用也。或ハ忍等を求ると。器
 物小拘る時ハ。萬物障となつて求かじ亦
 器物を放る意ある時ハ。其用全かす。その



地ふろしある萬物を即道具に用るの理あり。常ふ工夫す
る。是が爲小收用器なり

寸尺之用

寸尺の用といふは。大凡寸尺ハ規矩術の拘りざる所とい共
又用る所なり。今茲少くハ寸尺を用ゆべきこととす。其故ハ一本術用法小云く。二尺と五寸と。種の口と四倍す
といふなり。意ハ二尺を五寸とす。方尺二尺を五寸の長と
て心得し。種の口を四倍す。渾癸を種を夾むる
口を四倍す。是れ方尺も渾癸も俱小同寸
分ふかる。二尺乃方尺を五寸とす。時種と夾む
る口二分あり。是を八分の口と作す。二尺を計る。理の當
然なり。但し。傳法也。門弟子として愚するもの

丸渾癸の口をひろくして量むは量むやゆと故に
かの縮るなり。其終小二分の小口とて長と方尺二尺
を量むは。厘毛に至て治定の分らざる小依てかき

已尺之用

已尺の用といふは。已尺といハ己の身体を悉く寸尺とす。比
となり。意ハたぐ己が三趾ハ一間たぐ己が腕尺ハ二尺五寸
たぐ己が指尺ハ五寸たぐ己が跨尺ハ四尺八寸たぐ己
已が一尋ハ五尺二寸等。兼て試置をいふ。其外空眼先知乃
類をいふなり。而後作法の如く。堅木をなして。其業を發行
す。是二本術大要至極の全法なり

圖寫屈伸之用

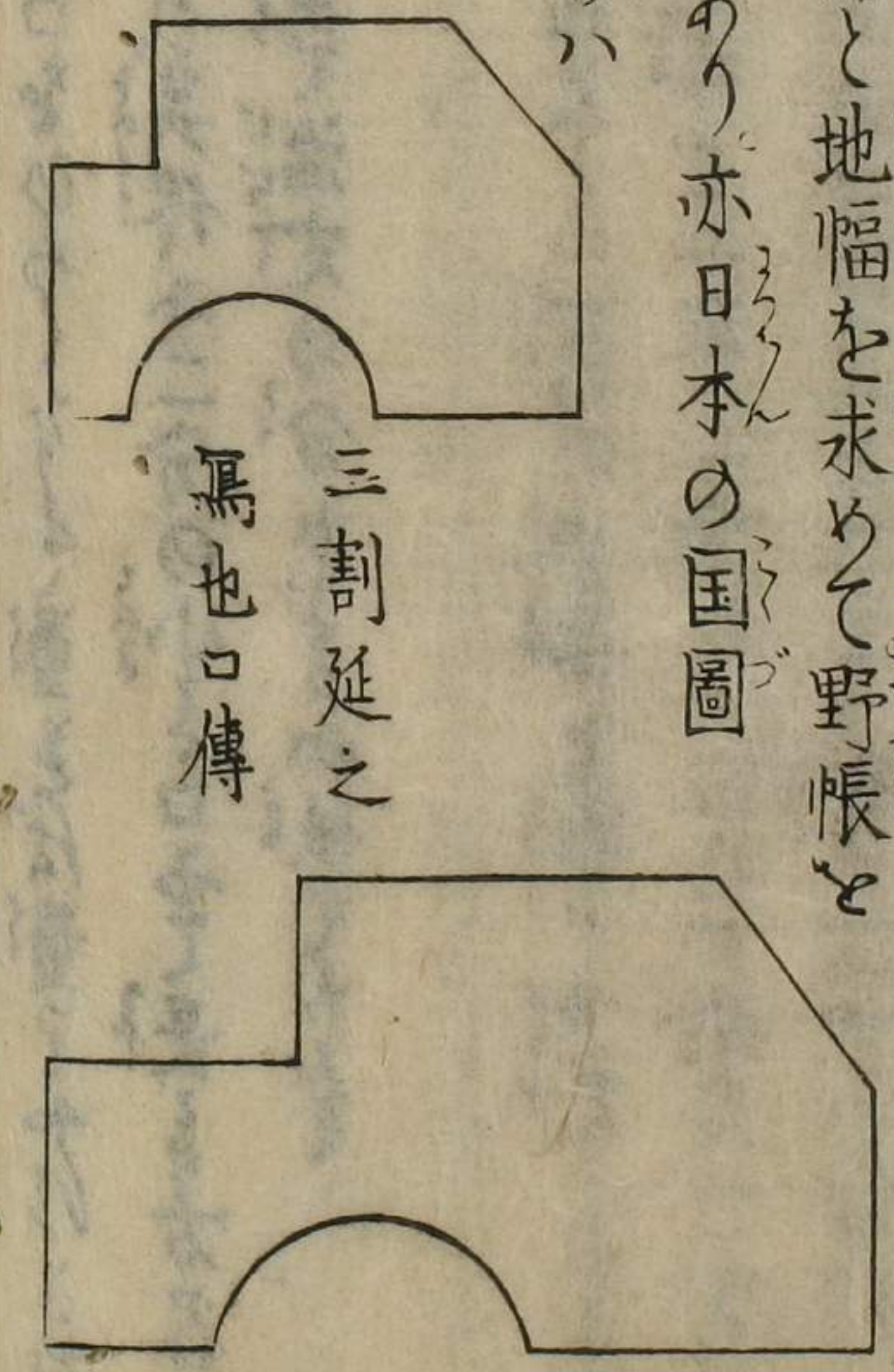
圖寫屈伸の用といふハ古傳云分間の圖を屈伸するは。寸

尺を用るなり。角寫と意順の矩を用るなり。蓋至極の角寫の秘傳あり。或ハ三分一。或ハ四分一。亦ハ何割等増減ハ寸尺小拘ず。渾癸を以て寫す。速うかり。但其かた不_レ以て働。時宜小_レづ。口傳云云。

又或傳云。国圖城圖等と延縮する。ハ假小紙の方より。分度を以て。方角と地幅を求め。野帳と仕立て寫取る。亦日本の国圖

等の矩小合ざる形ハ假小歩割を用ひてうけしる事あり。口傳あり。

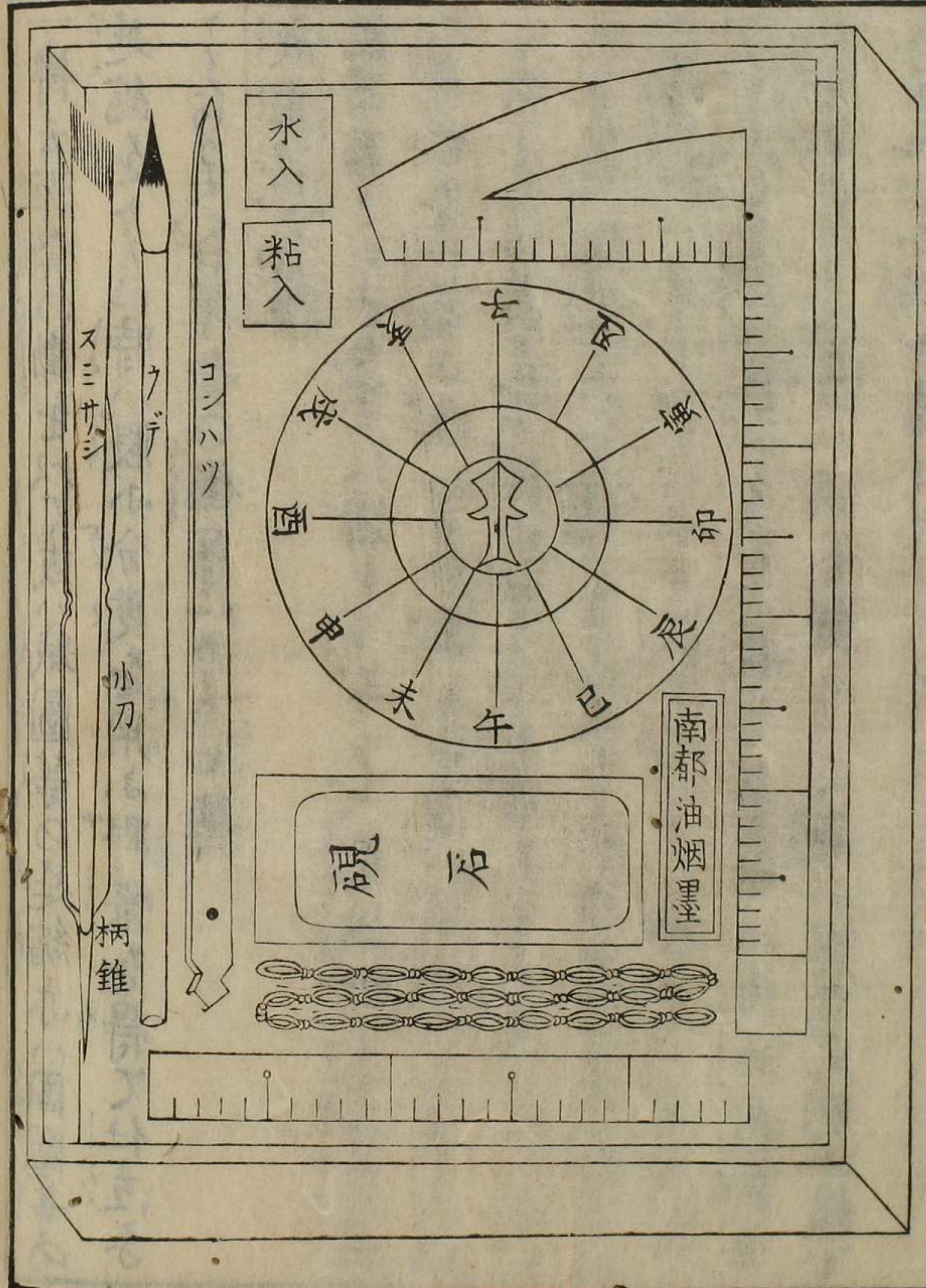
一傳云。渾癸の働を以て。或ハ城圖等の延縮亦ハ国圖等の延縮をかくし。時ハ假小分度を用。野帳を得て仕立てし。各渾癸の働第一なり。口傳



三割延之
馬也口傳

收用器之用。收用器といふは。下に図をみる。量地術急速要用の器械を一箱小收し。其制法云。箱の板を何れも其人の望小任す。春慶を以て塗し。佳

大さハ内矩。堅立六寸。横五寸。蓋を指入し。不_レも也。蓋ハ即量盤小とちり。此内小收る品。十二種あり。分度。矩。渾癸。小丸。方尺。横手。墨。慈。硯。墨。筆。水。入。粘。入。紙。裁。の。小。刀。等。なり。小。刀。ハ。柄。を。鋭。め。て。錐。小。用。也。又。別。小。錐。と。入。る。も。心。小。任。と。る。



舊器之號

- 貨度輻輪
- 貨彈覽天
- 圓盤
- 星刻
- 以寸多羅比
- 復寫
- 羅宇坐
- 漏墨
- 意順矩
- 方圖器
- 星尺

十六方位の模寫の器なりといふ

撥子新制の小九九等の用法も同といふ

天尺を量る器なりといふ

同上其用不辨

星上圭とも名くといふ

船中の器用とも其法知しど

模寫の器

十六方位の磁針なり

新制の墨悠々均といふ

換国の器といふ

同上

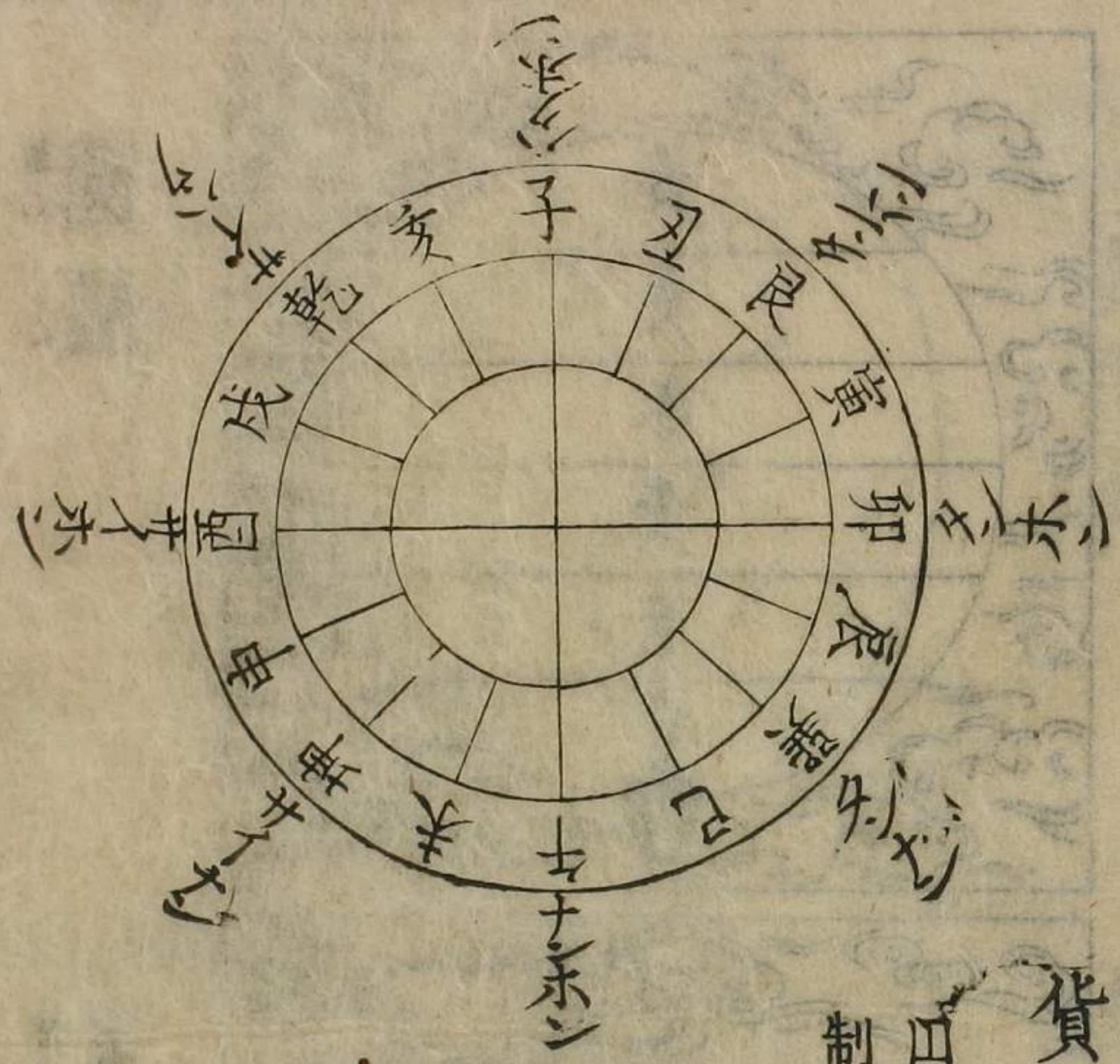
○日刻

日影を量るの器なり

右十二種ハ粗予ク見聞する処なり。其余の品阿須多羅以
 与加呂士惠牟須加呂士加苗太加路兜渾癸寸天経天緯標
 木など云々のり。其制法と不辨故小圖せ。又羅経方針指北
 方と云。古小所謂羅字坐と云。吾邦當時用る処の磁針
 小同じ。抑此術吾邦流布の始粗此旧器物を用ること有と云
 ども異邦の人の其便利と見ず。是は因てあれ
 たり其器物廢して吾邦今の量地者流今に於てハ旧器の号と
 知者なし。此故小初学の者往々小其器名と聞傳て怪と思ふ
 たり。其疑惑と散。其用法の失しこと知れん為に爰小圖
 を著して當流の學者小示す

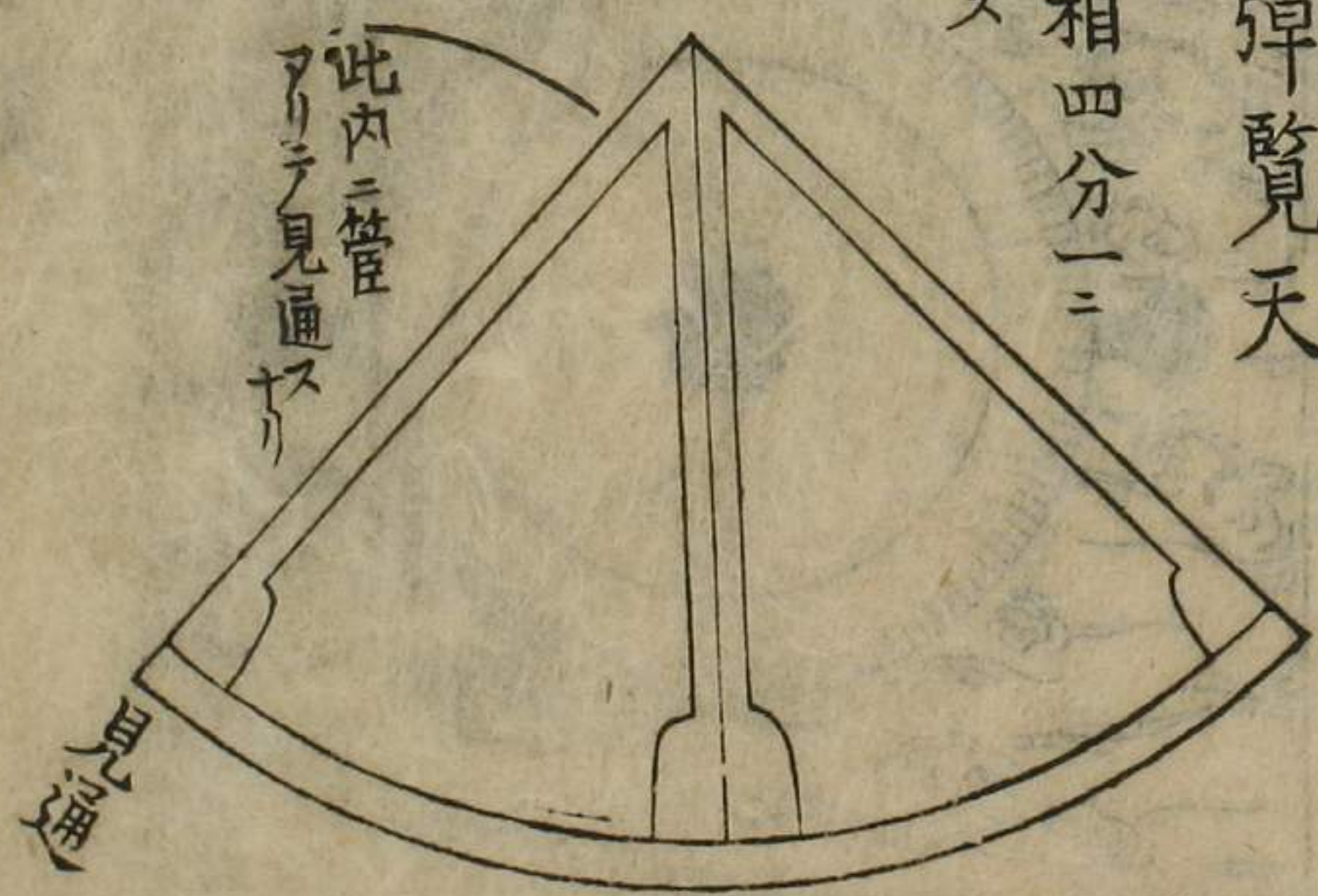
右の器械其名りつゝと當時の用ひす

貨度輪

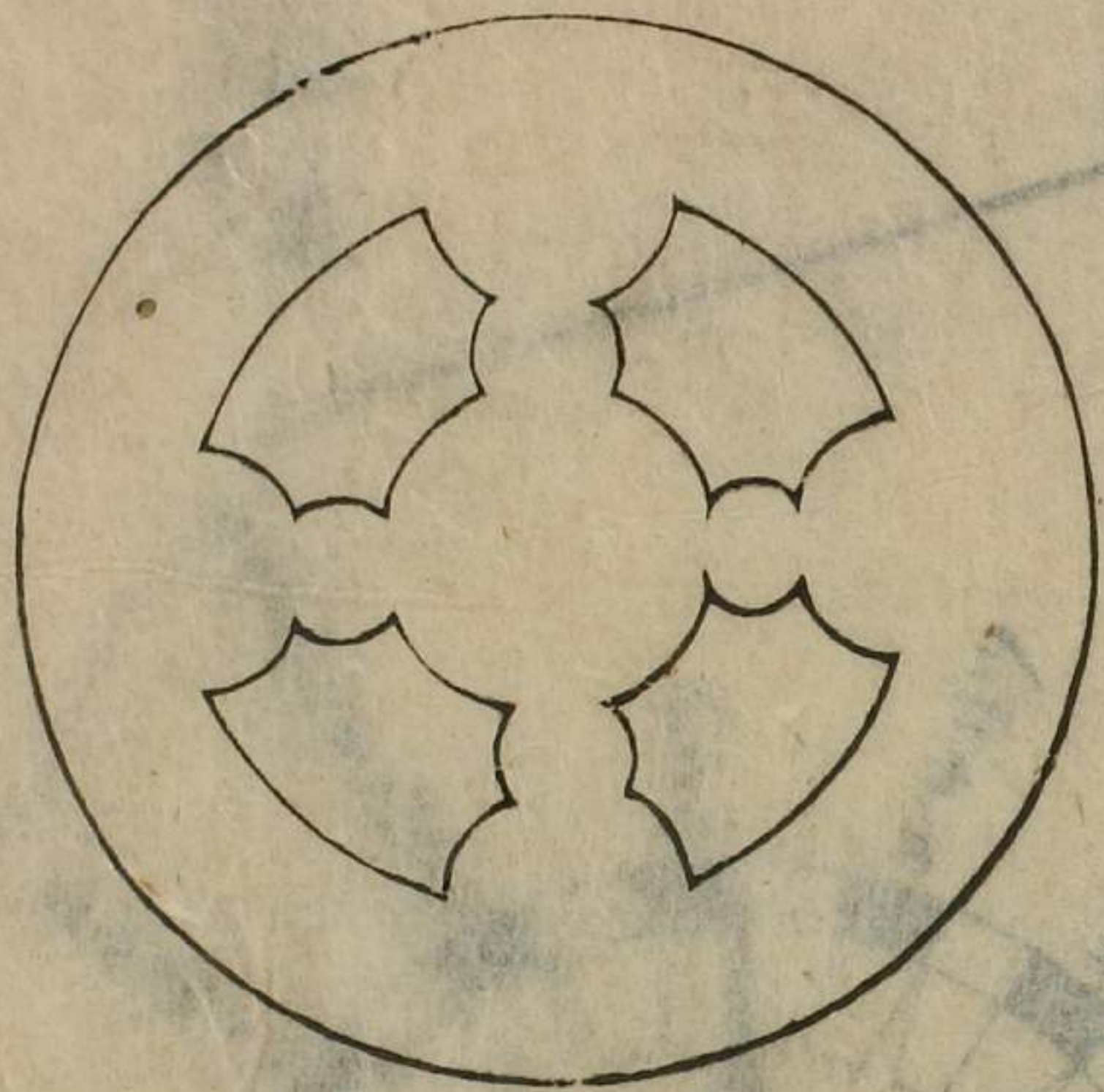


貨彈覽天

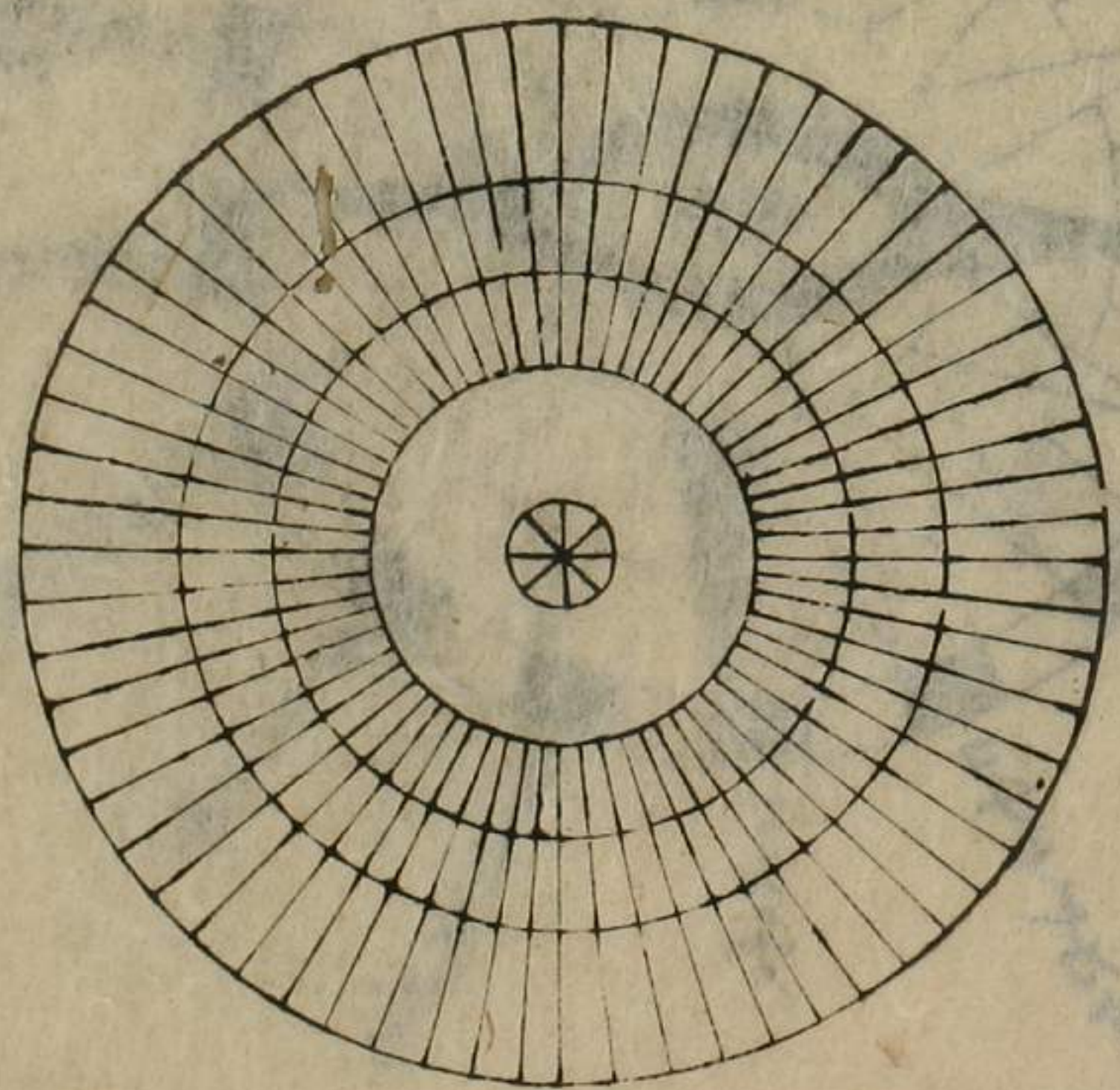
口相四分一
制ス



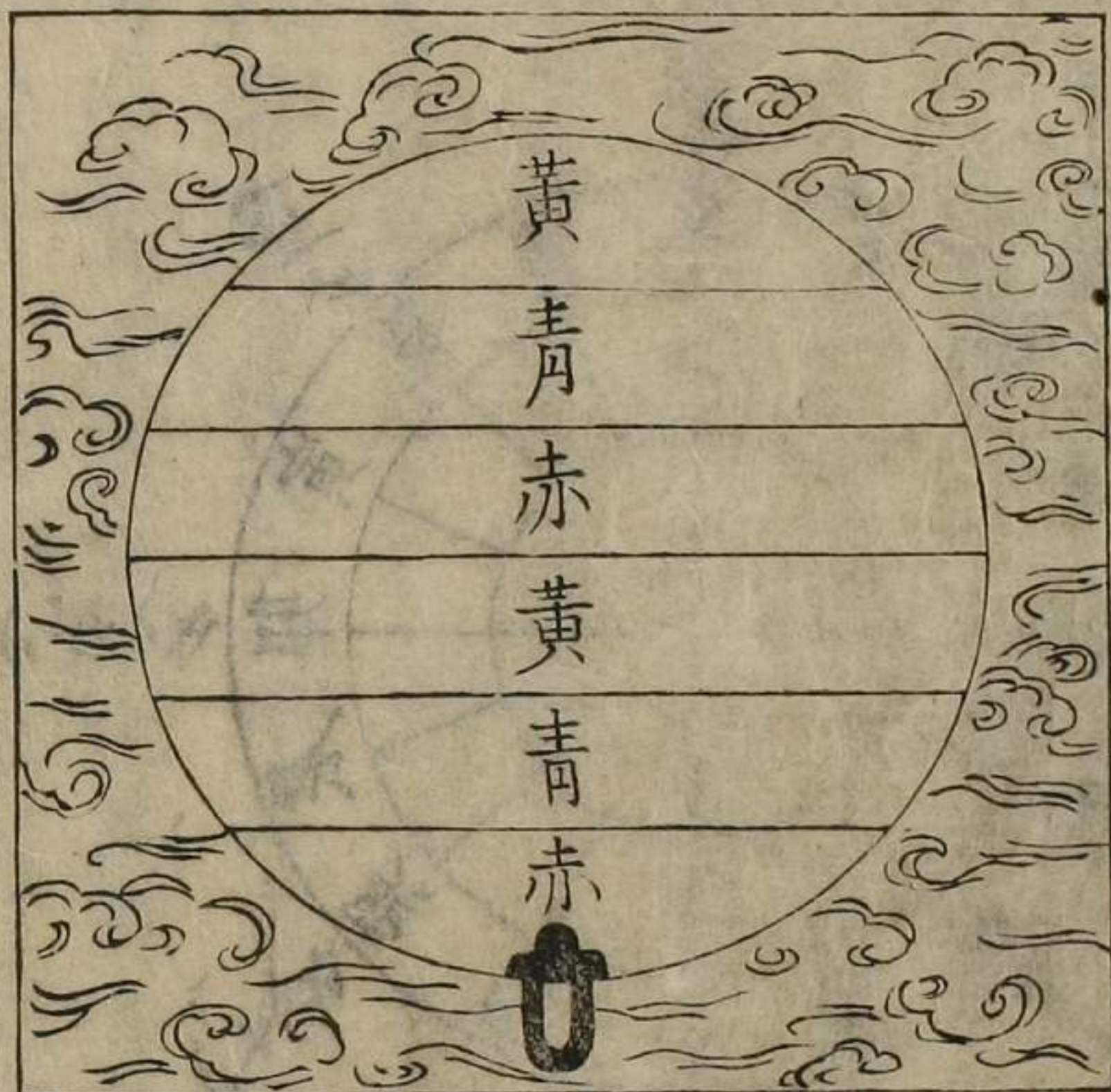
此内ニ管アリテ見通ス



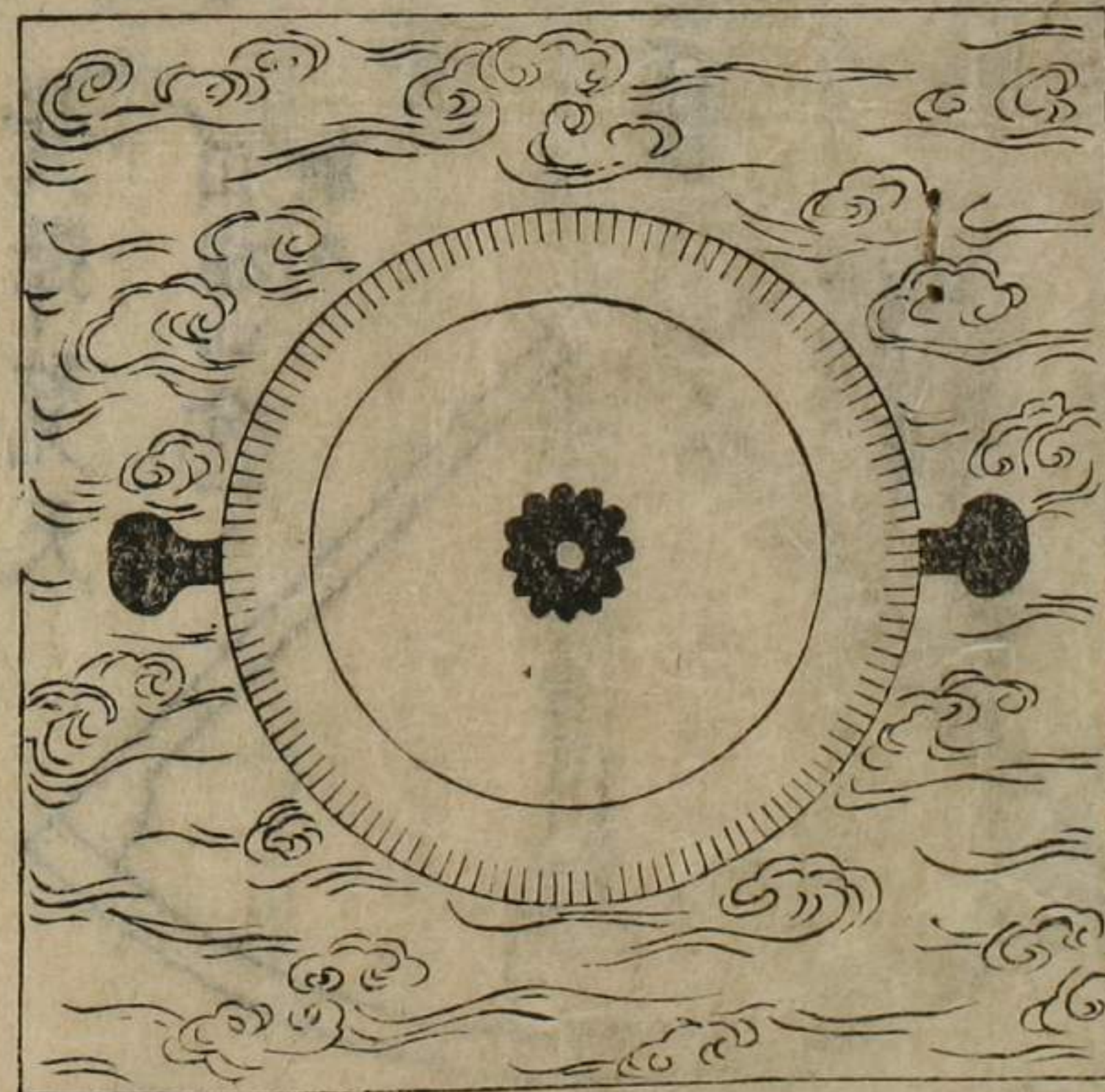
以寸多羅比



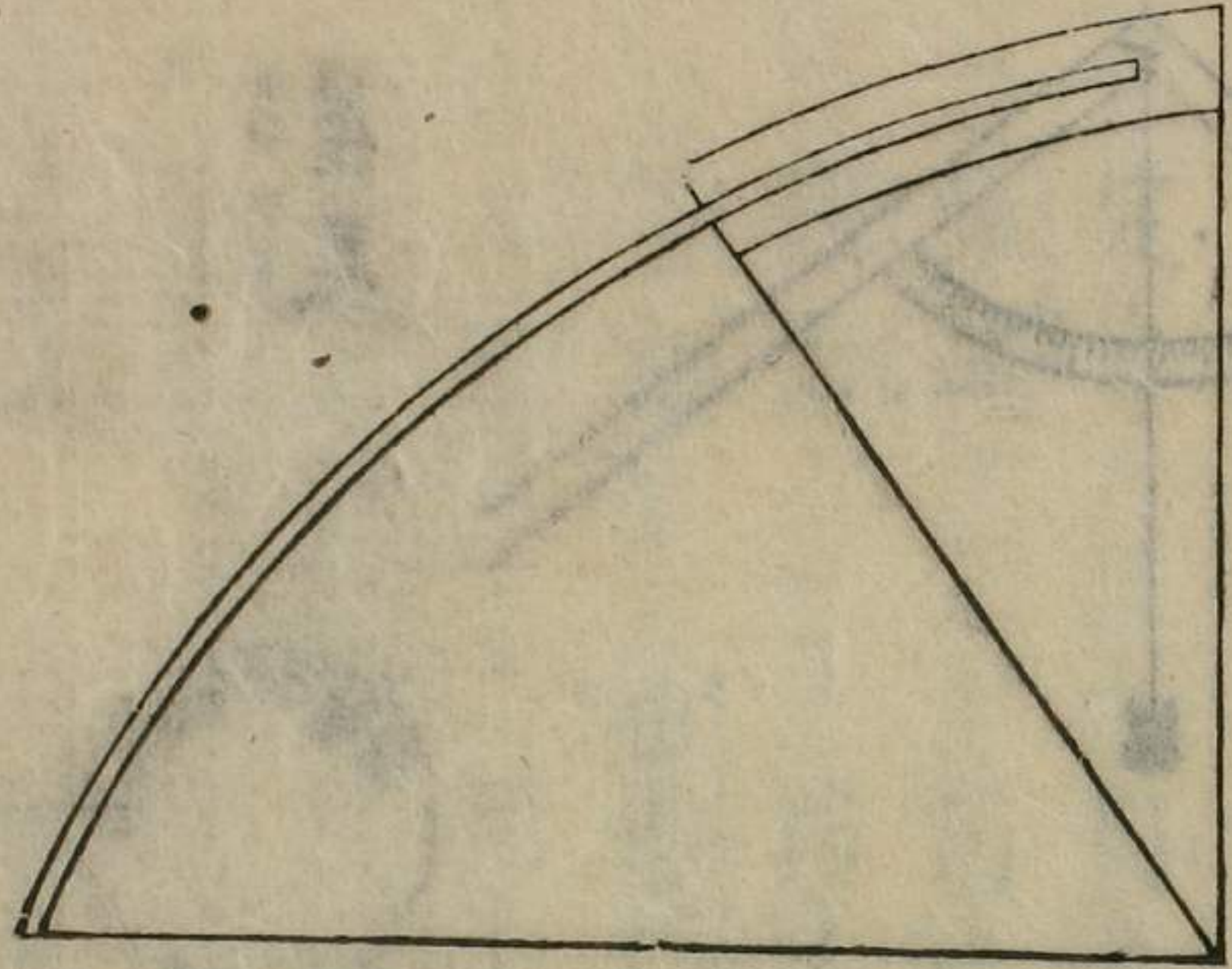
後寫



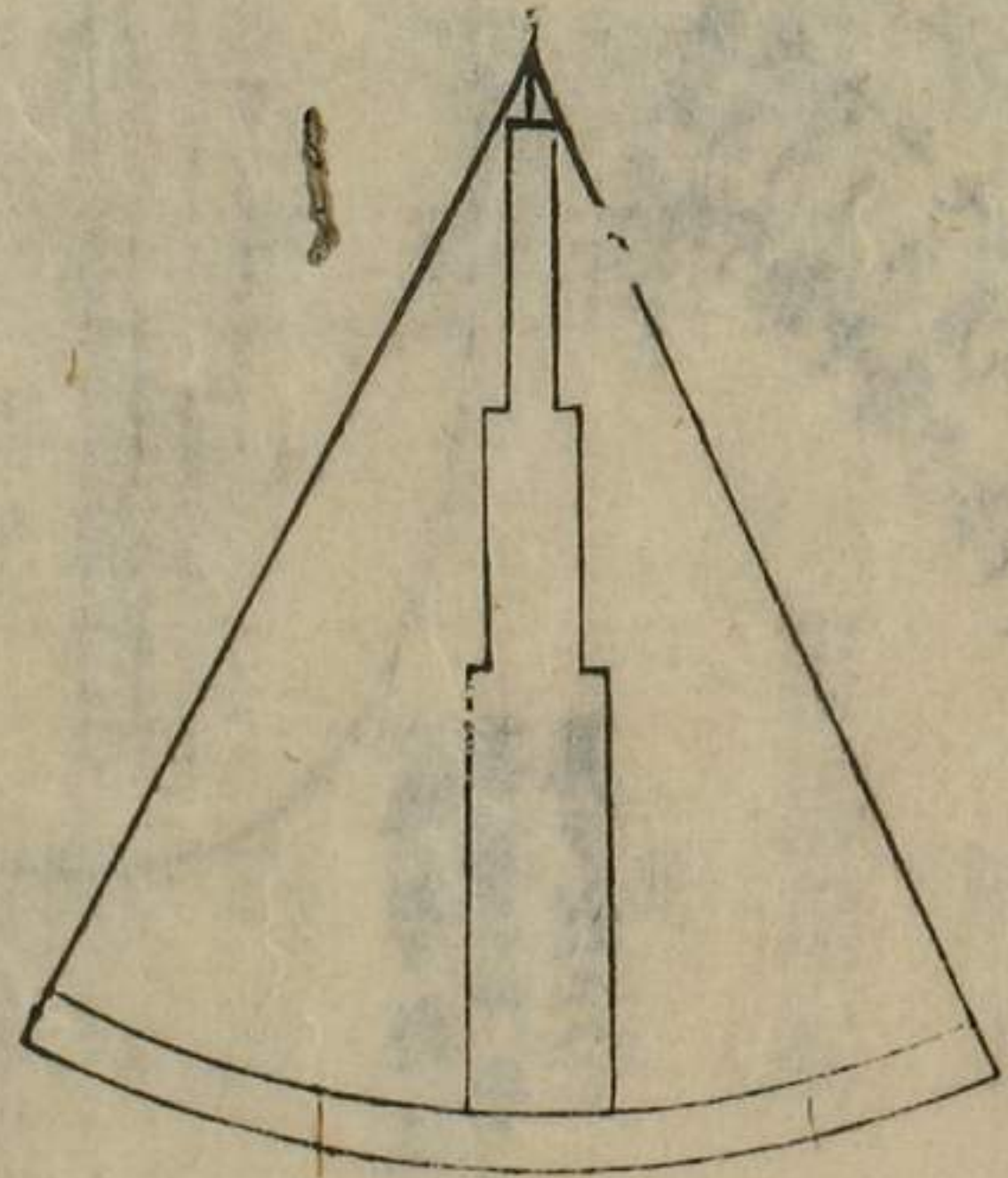
圓盤



星刻



意順規



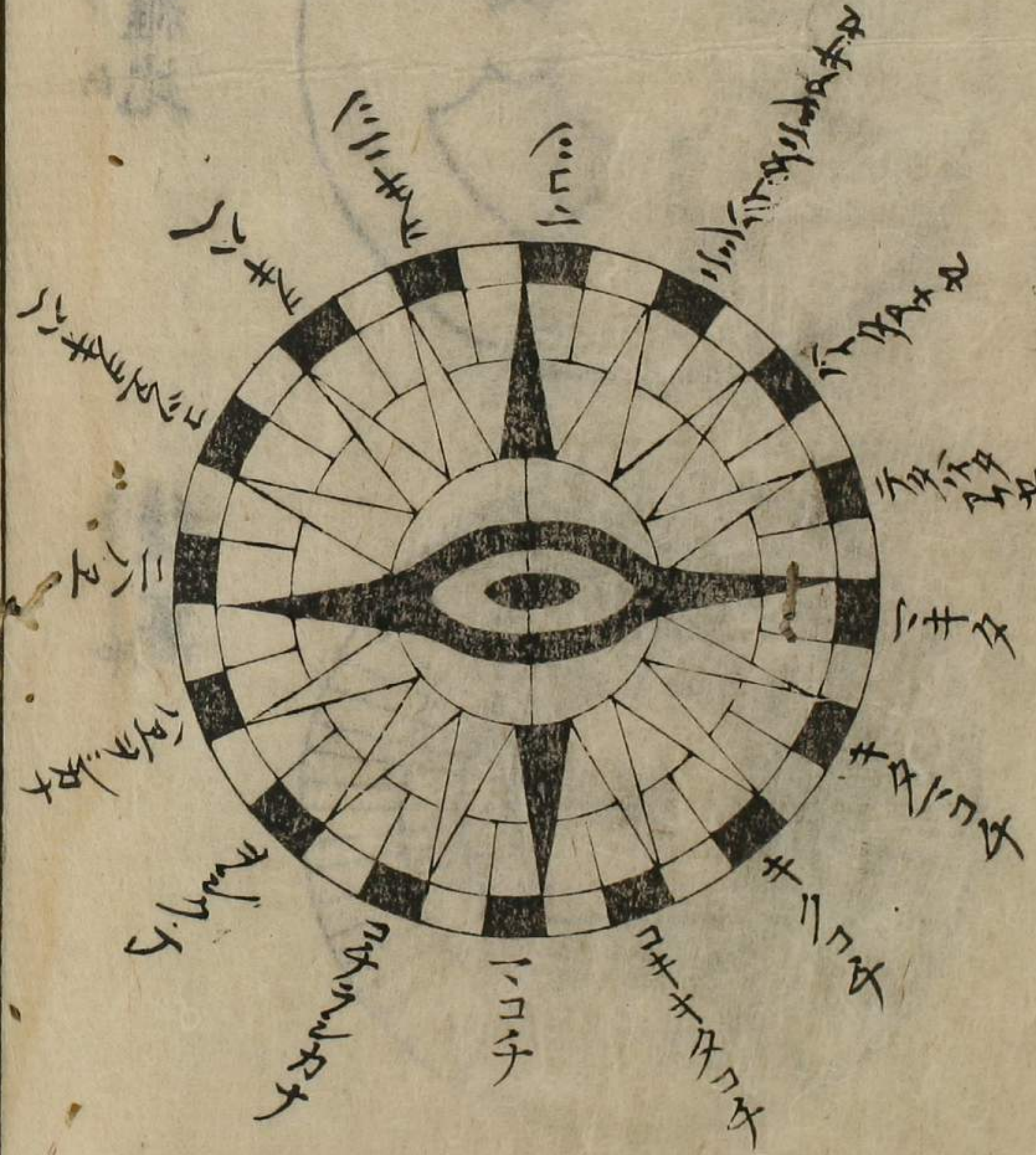
方圖器

量也

一



漏墨

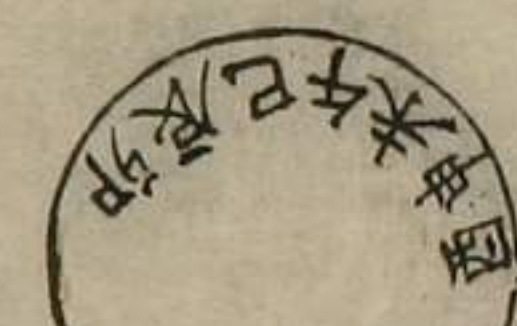
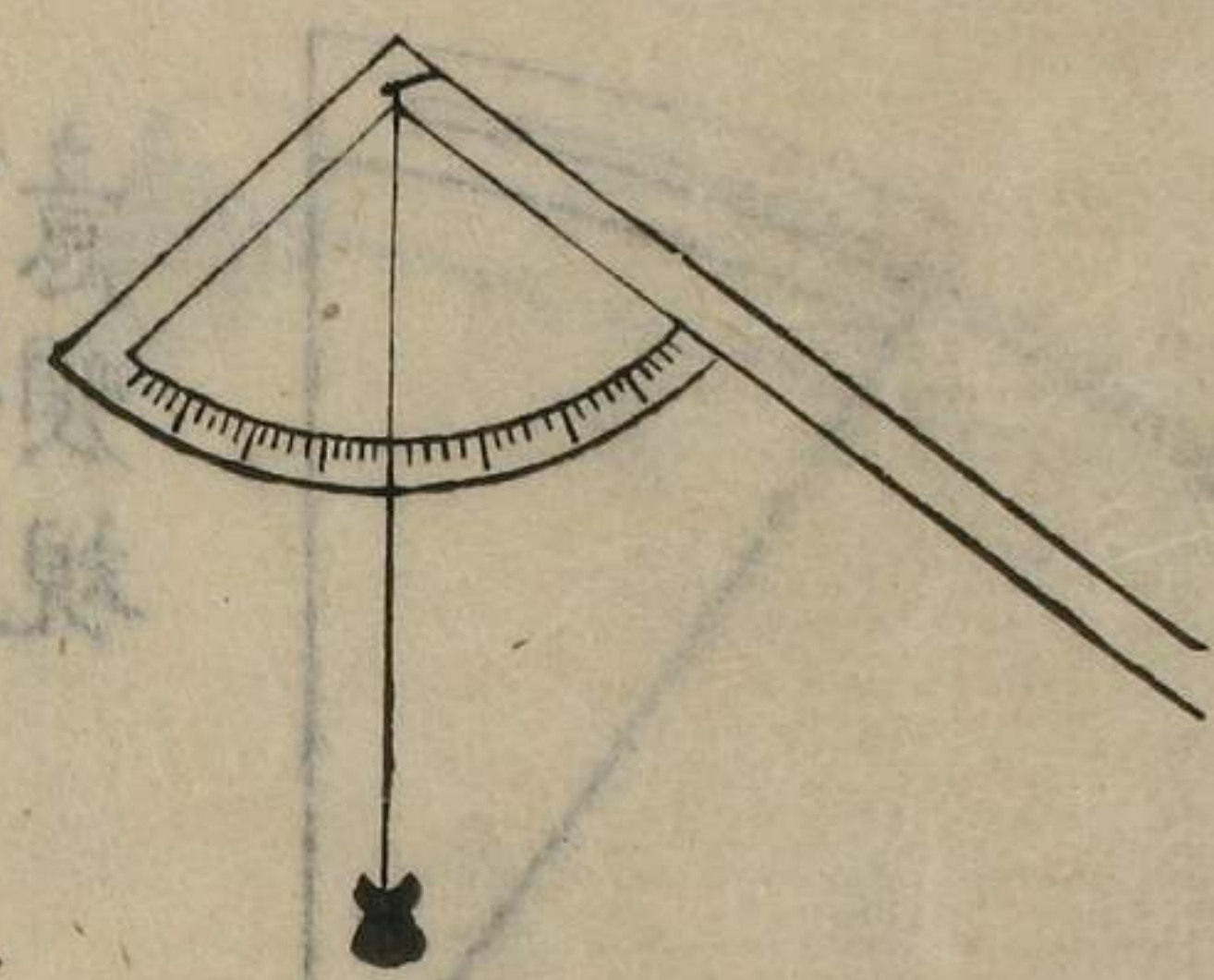


羅宇坐

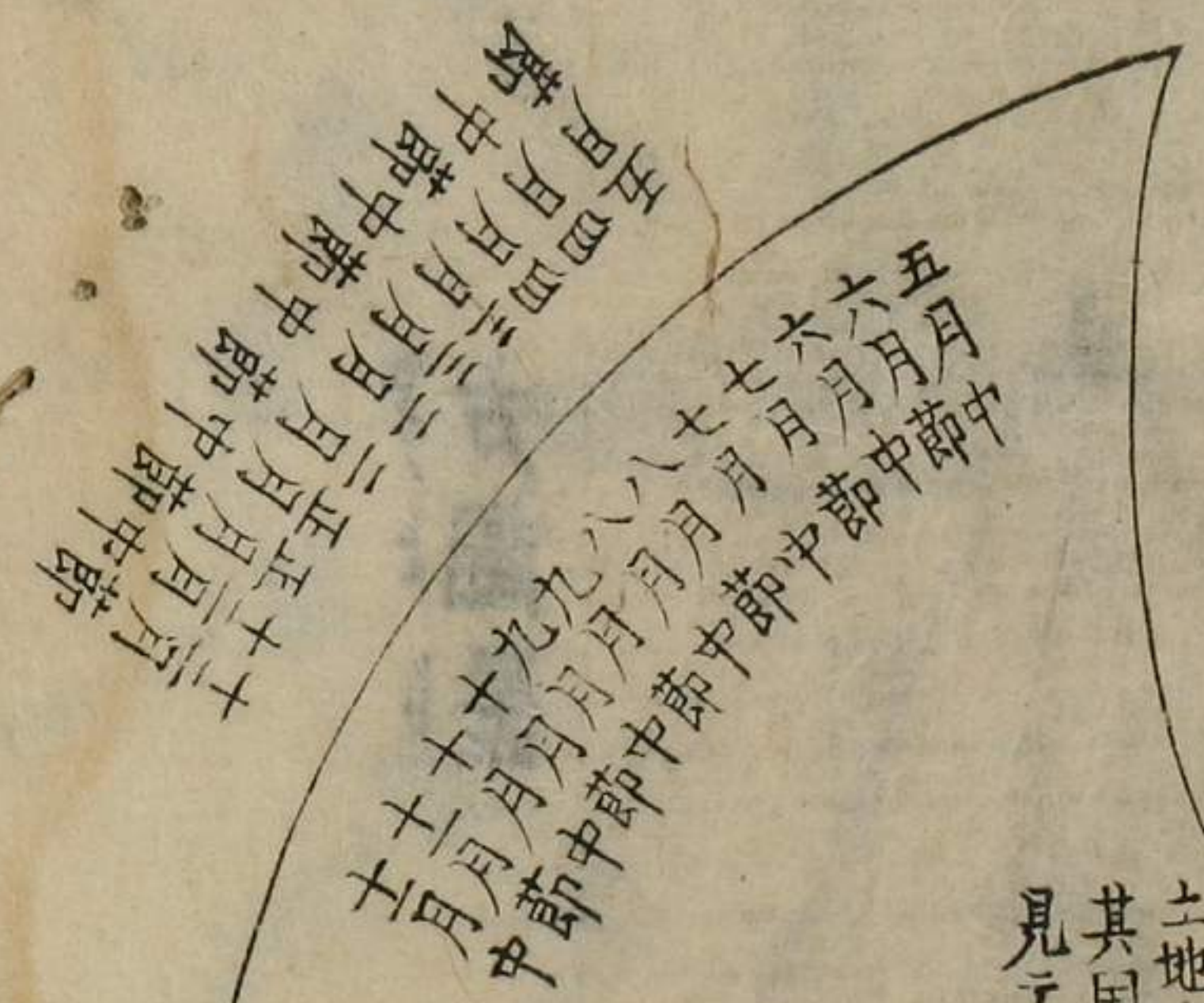
量也

一

星尺



日刻



土地因テ影違
其国其所影ヲ
見テ制スヘシ

一新器之號

○ 圖寫器	○ 分度矩	○ 基至金	○ 忍磁石	○ 元器	○ 管棹	○ 標檄	○ 錐繩	○ 定木	○ 鈎玉	○ 渾發
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
○ 隨川器	○ 虎法器	○ 大丸	○ 小丸	○ 磁石	○ 輪棹	○ 間棹	○ 和久	○ 間繩	○ 垂針	○ 見盤
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上

出前編又器用解

出器用解

出器用解

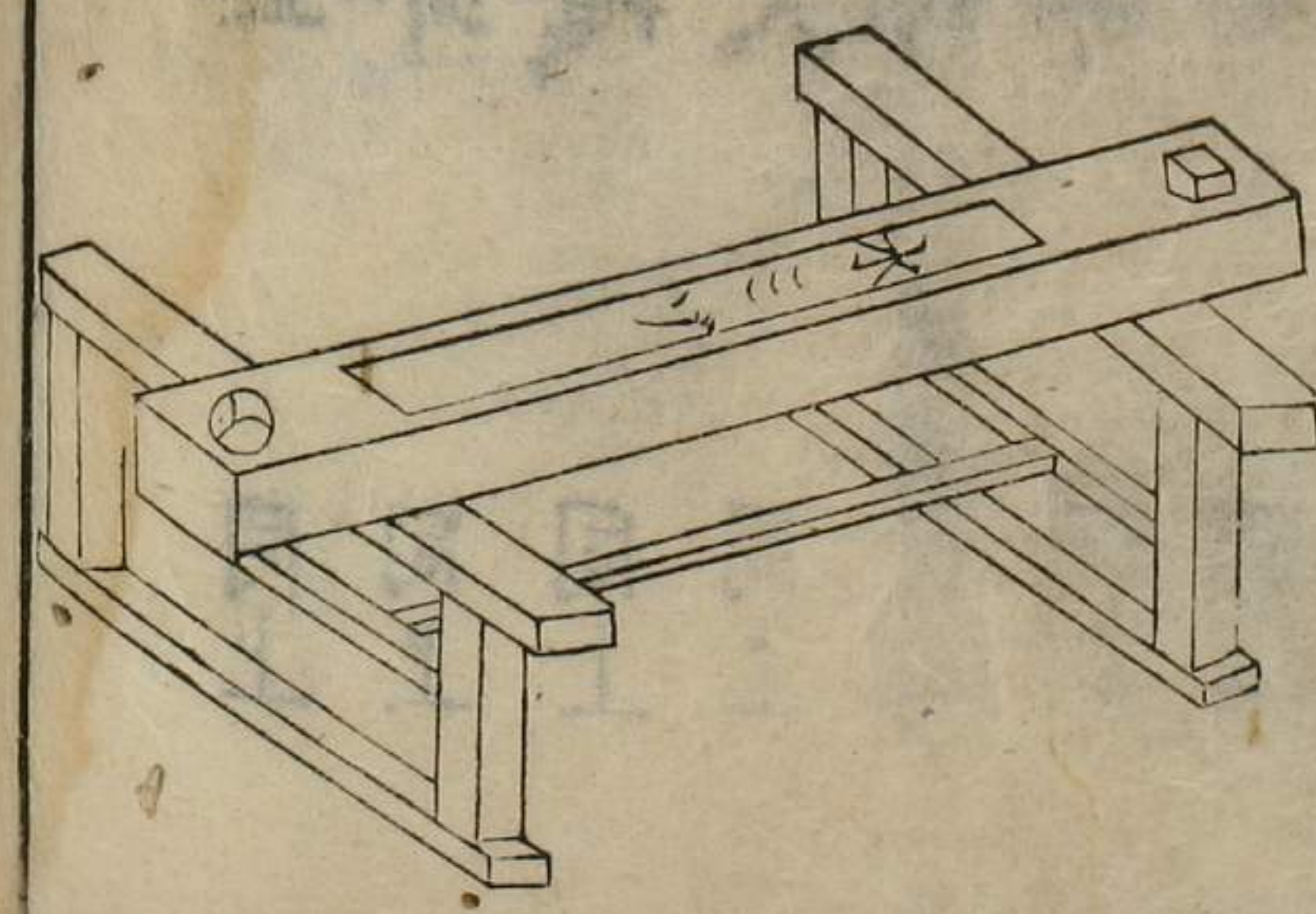
○方尺 並試定規 同上 ○折紙 同上

○火射 出極傳解 ○湊渾筭 出極傳解

○度・數 同上 ○遠里規 同上

○收用器 此章出前件 ○水平 出于此章

水平の制角木を以て之。長六尺横五寸小闊木のどくく制。表面小長四尺横三寸深と一寸五分の水溝と穿ち前後小目當り。高五寸此水溝より水と盛るなり。尤水平木は下り、臺と設けて随分不直なれやうに臺小て上げ下げして方を極むるから。臺の高さ好にふるべし。大方高ぶ



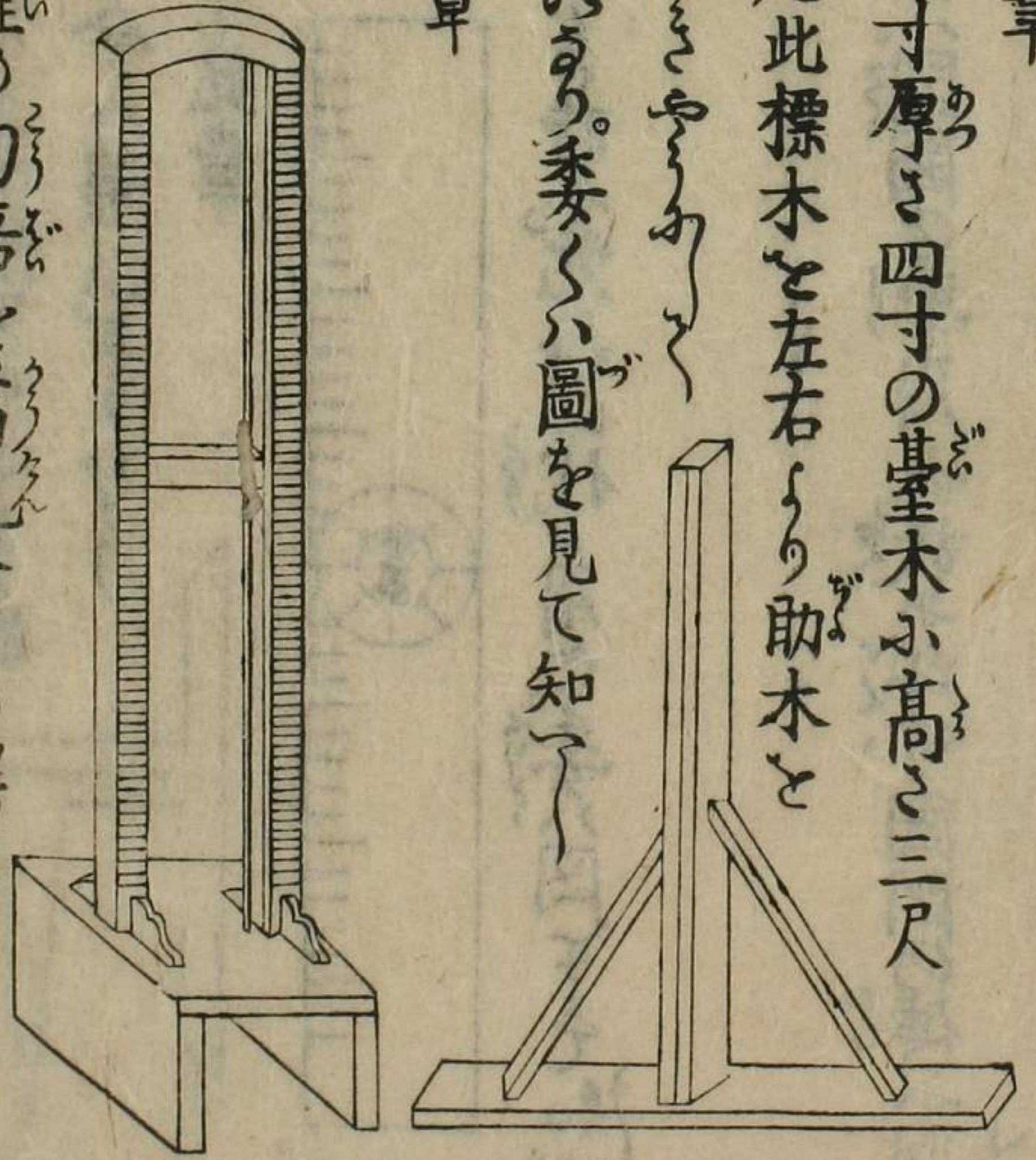
二尺より、二尺五寸を吉口とす。委ハ圖と見て知るべし。

○水準 出于此章

水準の制長四尺横五寸厚と四寸の臺木小高と二尺方三寸の標木と立る。尤此標木と左右より助木と施して少し斜邪なるとやうにして。扱標木に垂糸とかけり。委ハ圖を見て知ア

○槽 出于此章

槽の制真鍮を以て作る左右小曲尺の星と罰る高さ五寸元器の桁上小載て高程の勾倍を考見するの器なり。今專にこれを用ひ。委ハ圖を按て知ふア



○ 膝ちざり

出干此章

膝ちざりの制せい真ま鑰しちゆうを以て作る不安ふあんと定さだる器き物ぶつなり。不ふ便べん利りゆへに今いまハ用もちひざるなり

○ 板定木

出干此章

板定木いたさだきの制せい長一尺

五寸横よこ二寸真ま中に

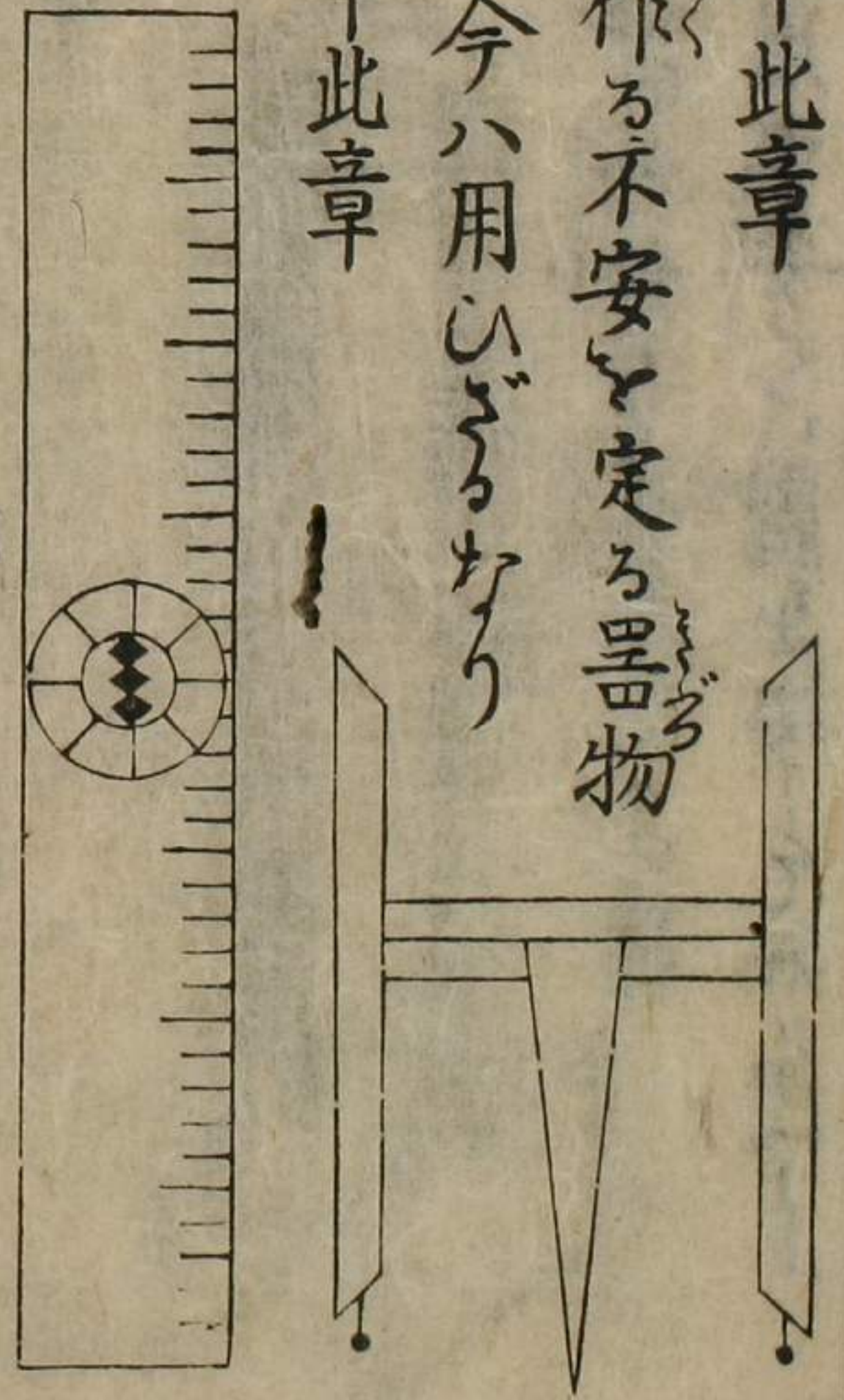
小丸こまるを彫や入いる。元もと罫か々々々々時とき小。元もと罫かの代しろ用もちの委あづかハ図ずとて知しべ

○ 種ゆま竿さか

○ 相あひ圖ず幟しちゆう

右種竿相図幟みぎゆまさかあひずしちゆう二罫にかハ国図こくずの要用也。故ゆへ印いん可か国図こくずの傳でん小図せうず

量地指南後篇卷之一終



中穴家
藏書印

